

パートナーシップによる生物多様性保全の取り組み

～遺伝子解析の研究から産学連携による保全まで～

自然・環境科学研究所

OSDGs 推進コーディネーター・特任教授

さとう ひろし
佐藤 裕司

キーワード

SDGs, 生物多様性, 地域集団, 遺伝的攪乱, 絶滅危惧種, パートナーシップ, ビオトープ

研究概要

兵庫県立大学は2022年3月24日にSDGs宣言を発し、持続可能な開発目標の達成に向けた取り組みを推進しています。その取り組みの一つに「生物多様性の保全」が掲げられ、自然・環境科学研究所（以下「自然研」）はその基礎研究から社会貢献までの重要な役割を担っています。生物多様性には、生態系、種、遺伝子の三つのレベルでの多様性があります。遺伝子解析による研究からは、同一種における地域集団が示す遺伝的な違いや交雑による遺伝的攪乱が明らかになってきています。生物多様性保全のためには、科学的な知見をもとに多くの主体と連携した取り組みが必要です。ここでは自然研の教員による遺伝子レベルの最新研究と、地域の学校や企業とのパートナーシップのもとで絶滅危惧種の保全に取り組んだ事例を紹介します。



絶滅が心配されるニッポンバラタナゴ
(谷本卓弥氏 撮影)



キリンビール神戸工場のビオトープ観察

アピールポイント

自然・環境科学研究所は、自然環境系（三田市）、景観園芸系（淡路市）、地域資源マネジメント系（豊岡市）、森林動物系（丹波市）、宇宙天文系（佐用郡佐用町）の五つの系から成り、宇宙が誕生してから今日までを語ることのできる特色ある附置研究所です。今回は、生物多様性保全に関する共同研究を積極的に進めている自然環境系の取り組みを紹介します。自然環境系では、令和3年度に15の研究機関等と共同研究を進め、8件の論文を公表しました。生物多様性保全をはじめ、SDGsの推進のためには研究で得られた知見を社会に実装する取り組みが求められます。自然環境系の教員は兵庫県立人と自然の博物館の研究員を併任しており、博物館活動を通じて多様な主体とネットワークを持っています。このため、パートナーシップによる保全活動に強みがあり、ノウハウを身につけた教員が多数います。